

## 英語教育における共同プロジェクト

松本青也<sup>※1</sup>

### I. はじめに

学校における英語教育の目的は、時代の要請に呼応して変化を重ねてきた。学習指導要領をとってみても、1947年に初めて試案として出されてから、現行版まで7回の改訂を重ねてきたが、1989年版の目標に初めて「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」という文言が登場し、それまでひと括りにされていた、「聞くこと、話すこと」が「聞くこと」と「話すこと」に分けられ、口頭でのやり取りが重視されるようになった。次の1998年（現行）版では、更に「実践的コミュニケーション能力」という言葉が加えられ、コミュニケーション重視の方針が更に強められた。

その後、21世紀における日本のあるべき姿を検討することを目的に内閣総理大臣のもとに設けられた「21世紀日本の構想」懇談会が2000年に報告書『日本のフロンティアは日本の中にある』を出し、英語に関しては「社会人になるまでに日本人全員が実用英語を使いこなせるようにする」といった具体的な到達目標を設定する必要がある。（中略）長期的には英語を第二公用語とすることも視野に入ってくる」（p.20）とした。こうした流れを受けて、文部科学省は、2002年に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」、翌2003年には「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定した。そこでは、グローバル化とIT革命の急速な発展に呼応して、日本人が世界共通語としての英語のコミュニケーション能力を習得することが不可欠だとした上で、5ヵ年計画で2008年度を目指した英語教育の改善の目標や方向性と、その実現のために国として取り組むべき施策を具体的に明示した。

2002年度から小学校で英語活動が始まったことから分かるように、英語教育の充実と改善に、これほど行政が本腰になったことは戦後初めてで、その成果に大きな期待が寄せられた。そして文部科学省は2004年度の実績についての『文部科学省実績評価書』の中で、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールを85校指定したことや、英語教員に対する研修に平成16年度は9,823人参加したことなどを挙げて、「平成19年度末までの達成目標に向けて、概ね順調な進捗状況にあると判断」（p.4）している。

確かに先進的な英語教育を一部の学校で推進することも、教員の指導力を向上させることも大切なことではある。しかし、「英語が使える日本人」にするためのこうした一連の施策に全く欠落しているのは、学習者に何のために、どのようにして英語を使わせるかという観点である。例えば、日本語母語話者は毎日コミュニケーションのために日本語を使っているが、やり取りする情報がないまま、ただ日本語を意味もなく使っているのではない。日本語でコミュニケーションを図るとき

---

※1 言語コミュニケーション学科

は、必ず知りたい情報や伝えたい情報がある。ところが、英語教育では、そのやり取りしたい情報がないまま、ただむやみに英語を使わせようとしているのである。英語で「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育てようとしている教師自身ですら、面倒な思いをしてまで特に外国の人達とやり取りしたい情報はないというのが実情ではないだろうか。つまり普通の生活では英語を使う機会も必要もない日本で、英語使用への明確で効果的な動機付けを用意しないまま、ただ「英語が使える日本人」になることを期待し、強制しているのである。

本論は、コミュニケーションへの動機づけに焦点を絞り、その効果的な方法としてICTを活用した様々な共同プロジェクトを検証して、学校英語教育への導入を提言しようとするものである。

## Ⅱ. 施策としての動機づけ

『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」では、「英語教育改善のためのアクション」として7項目の施策が挙げられている。最初の「英語授業の改善」では、「英語を使用する活動を積み重ねながらコミュニケーション能力の育成を図る」としているが、目標としては、

- ① 英語の授業の大半は英語を用いて行い、生徒や学生が英語でコミュニケーションを行う活動を多く取り入れる。
- ② 中・高等学校等の英語の授業で少人数指導や習熟度別指導などを積極的に取り入れる。
- ③ 地域に英語教育に関する先進校を形成する。

というだけで、学習者が英語を使う場面としては、相変わらず英語の先生や、時おり訪れるALTや、あるいは教室の仲間とのやり取りしか想定していない。

また、第3項目の「英語学習のモチベーションの向上」では、

- ① 毎年10,000人の高校生が海外留学する。
- ② 授業以外で英語を使う機会が充実する。
- ③ 英語を用いて世界へ情報発信するなど、国際交流を一層活発にする。

という3つの目標を立てているが、②の英語を使う機会の充実については、「地域人材等を活用した取組の推進」として「英語に堪能な社会人等の活用や、ALT等の活用によって、学校を中心とした英会話サロンやスピーチコンテストなどの取組を促進する」とか、「外国語長期体験活動の推進」として「小学校高学年を対象にネイティブスピーカー等と長期にわたり共同生活をする中で外国語コミュニケーション能力を培うとともに、国際化に対応できる人材を育成するためのモデル事業を実施する」、そして「特色ある取組に関する事例集の作成等」としては、「英語の授業外における英会話サロンやサマーキャンプ、留学生や海外の子どもたちとの交流、英語放送の積極的活用など、英語を使う機会に関する特色ある取組を取り上げ、周知を図る」としているだけである。

つまり、留学やサマーキャンプのような学校外の活動を除いた授業での取り組みについては、従来とほとんど同じである。ICTの著しい発展が海外とのリアルタイムの自然なコミュニケーションを可能にしたことで、国際的な共同作業が簡単にできるようになったというのに、そうした新しいメディアの利用については、「国際交流の推進」として「英語版学校紹介ホームページ作成の促進」が挙げられているだけである。

その背景には、ミレニアム・プロジェクト「教育の情報化」や「e-Japan 重点計画」などで2000

年度から2005年度までの6年間に各学級の授業でコンピュータやインターネットが活用できる環境を整備することを目標としながら、2005年3月末現在で、普通教室のLAN整備率が全体で44.3パーセントでしかないという実態や、コンピュータで指導できる外国語科教員の割合も中学で56.4%、高校で46.2%でしかないという情報化への遅れがある（文部科学省、2005）。

しかし20世紀の日本の学校英語教育がコミュニケーション能力育成の面で成功しなかったのは、何よりも学習者が自然な形で英語を使う機会も必要もなかったため、今後21世紀に英語教育が変容して成功する可能性があるとするれば、最も期待が寄せられるのは、20世紀には不可能であったコミュニケーション活動をICTを活用して豊かに展開することに他ならない。ICTこそが、そしてとりわけ日本ではICTだけが、すべての学習者に対して英語による日常的なコミュニケーションへの自然な動機付けを可能にしてくれるからである。

### Ⅲ. コミュニケーションへの動機づけ調査

整備が遅れているとはいえ、やがてすべての教室がLANに接続されてインターネットを利用できるようになり、教室で外国の人と英語でボイスチャットやビデオチャットをしてリアルタイムにコミュニケーションを図ることができるようになる。しかしそうなれば、日本人同士の不自然なコミュニケーション「ごっこ」を強いられていた学習者たちは、日ごろの学習成果を自然な形で発揮する場が与えられて、嬉々としてマイクに向かうのだろうか。

実際は、環境を整備して、さあ何でも英語で話さないと言われても、それだけで話せるものではない。大学レベルで行った調査でも、せっかく与えられた機会を利用しない学習者が予想以上に多いことが判明した（松本・野口、2003）。この調査では、ネイティブスピーカーとのボイスチャットを組み込んだ民間のオンライン英語教育プログラムを使い、好きな時に、好きな場所でコンピュータを介して英語の会話を楽しむことができる機能が、実際にどのように活用されるかを検証した。

このプログラムは2002年度より3年間、大学主催の公開講座として導入されたもので、参加者は講師によるクラス付の「個人指導コース」か、クラスのない「自主学習コース」のいずれかを選択した。調査対象は「個人指導コース」を選んだ40名（学生33名 社会人7名）で、受講前と受講後にアンケート調査を行い、英語学習に対する戦略やモチベーション、ボイスチャットに対する意識、及びその変化を調べた。調査項目はリッカート5段階評定尺度におけるSILL（Strategy Inventory for Language Learning）、及びMSLQ（The Motivated Strategies for Learning Questionnaire）などを参考に作成した。

受講前のアンケート（被験者回答数37名）では、受講の理由（複数回答可）として、

- (1)いつでも好きなときに学習できるため（26名/70.3%）、
- (2)今までの勉強方法ではあまり成果があがらなかったため（14名/37.8%）、
- (3)オンライン教材を使う英語学習に興味があったため。（9名/24.3%）、
- (4)他の学習者の進捗状況に合わせなくてよいため（5名/13.5%）、などが挙げられた。

英語の四技能のうちで力をつけたい技能は、

- (1)スピーキング（33名/89.2%）、
- (2)リスニング（4名/10.8%）、だけであった。

苦手な技能は、

- (1)スピーキング (19名/51.4%),
- (2)リスニング (11名/29.7%),
- (3)リーディング (3名/8.1%),
- (4)ライティング (2名/5.4%), の順であった。

受講後のアンケート (17名) にはオンライン学習とボイスチャットについての項目を加え、Paired-sample t testで学習ストラテジー・モチベーションに関する有意差検定 (t検定) を行ったところ、Self-efficacy for learning and performanceとTask value in English learningについては、受講前よりも受講後の方が負に有意であるという結果になった。これは、いわゆる Novelty Effectによる可能性があり、新しい学習方法についての過度の期待が徐々に薄れ、一年後には冷静さを取り戻したためと考えられる。

一方、事前アンケートでは向上させたい技能としてスピーキングの能力が突出していたが、予想に反して受講期間中ボイスチャットをまったく利用しなかった受講生が53% (9名) と、過半数を占めた。そこで受講後のインタビューに協力を申し出た13名 (個人指導コース7名と自主学習コース6名) について詳細なインタビュー調査を行った結果、利用しなかった理由として次のようなものが挙げられた。(複数回答)

- (1)自分の英語を他の参加者に聞かれることを意識する。(9名/69%)
- (2)とても興味があったが、結局勇気が無くて入れなかった。(6名/46%)
- (3)英語での質問がわからないと申し訳なく思う。(3名/23%)
- (4)自分の英語力では、会話についていけないのではないかと思う。(2名/15%)
- (5)コンピュータのトラブルで接続できなかった。(1名/8%)

その他、「難しい内容を話しているかもしれないので不安だ」、「私が入ることで、会話がストップしてしまうのではないだろうか」、「他の参加者に比べて自分の英語が劣っていたら恥ずかしい」などという意見も挙げられ、言語能力そのものよりも、むしろ緊張や不安などの心理的な要素が大きく影響していたことが分かった。

一方、ボイスチャットを利用した受講生の多くも、実際にネイティブと話す際には様々な不安や課題を感じていたようで、「参加しても何を話してよいかわからない」、「その場限りの話し相手が多いので、間違えたときの不安感は少ないが、その反面コミュニケーションを深めようという気持ち薄れる」、「対面式ではないから気楽である反面、話さないと自分の存在がなくなってしまうので、話し続けなければいけないというプレッシャーを感じた」、「他の参加者と比べて自分の英語力が劣っているので話しづらい」などの感想を述べた。

この調査で分かったことは、ICTによる実践的コミュニケーションを志向する英語教育が、主にメディア、言語、心理の3つの側面で多様な課題を抱えていることである。まずメディアについては、ネチケットとセキュリティ対策も含めてかなりのメディアリテラシーが教師と学習者の双方に求められる。学習が円滑に進まない、それだけで確実に意欲が削がれてしまうものである。

次に言語面では、リアルタイムの会話が成立するように事前に時間を十分に取って練習させなければならない。具体的には、日常的な慣用表現とその音声面での特徴など、ボイスチャットの基本

となる知識を与えた上で、抽象概念の表現や機能表現、感情表現なども含めて十分に練習させておく必要がある。更に、毎回の具体的な話題に関して、事前に自分の意見をまとめさせながら、そのために必要な関連表現を豊富に与えておかなければならない。

しかし、そのようにして必要な知識や技能を一応身につけても、まだコミュニケーションに踏み込めない学習者が多いのは、心理的な原因のためである。その一つは英語使用への不安である。この不安を取り除くには、外国語学習では誤りや不完全さが当然なことであると認識させながら、達成可能なタスクを積み上げることで成就感を与え、自信を持たせる必要がある。しかしそれでもまだコミュニケーション活動が活発になる保証はない。Dörnyei (2003) が情報を伝え合おうとする意欲 (Willingness to Communicate) の条件として、自信と欲求を挙げているように (p.13), 更に必要なことは、何としても英語で手に入れたい、あるいは伝えたい情報があって、そのためにどうしても英語を使いたくなるという状況である。

一般に、動機が高まれば不安も軽減される。ただし、動機付けが外部からの賞罰のコントロールなどによる場合は、動機が高まれば高まるほどかえって不安や、ストレスなどを増やしてしまうことも指摘されている (Ehrman, 1996)。つまり、阻害要因としての外国語不安を克服してコミュニケーションを図るには、まず賞罰ではなく、やり取りする情報そのものに強い興味や関心が向けられなければならない。その上で、身近にはいない外国の人達と、ネット上で目標を共有する親密な人間関係を築き、その関係を維持発展させながら目標を達成しようとする状況を作り、英語でコミュニケーションを重ねることの必然性と必要性を実感させることである。そうした自然なコミュニケーションへの動機付けに、ICTは大きな役割を果たしてくれる。

#### IV. 共同プロジェクトの条件

英語教育にICTを活用した共同プロジェクト活動を導入することで、学習者は海外の人達とコミュニケーションを図るための道具として、自然な形で英語を使うことができる。現在世界中で展開されているプロジェクトの内容や形式は千差万別であり、簡単なものから長期にわたる大規模なものまで、様々なものが行われているが、英語教育の一環として日本の学習者を対象として行うなら、可能な限り次の4つの条件を具備したものが望ましい。

##### ①集団単位での活動

学習者の各々が単独で自分の課題に取り組むプロジェクトもあっていいが、集団で取り組めば仲間からの刺激や新しい発想が得られるし、目標に向けてのペース配分や構成で不安になったりすることもない。議論や交渉、説得、調整などの場面を数多く経験させることもできる。集団で取り組んだものでありながら、随所に学習者それぞれの個性が輝いているようなプロジェクトが望ましい。

##### ②科目を超えた取り組み

大学の段階では、英語に関連した科目の中で共同プロジェクトを授業外に発展させることが自由にできるが、初等中等教育の段階では、現行の指導要領(1998・99年告示)で新設された「総合的な学習の時間」と連携して共同プロジェクトを展開することができる。国際理解等の横断的・総合的な課題などについて学習活動を行うことを趣旨とするこの時間こそ、英語を手段としてコミュニケーションをとりながら、様々な課題について学習するには絶好の機会である。共同プロジェクト

の代表的な支援団体である iEARN<sup>\*2</sup> (International Education and Resource Network) で活動する教師も、外国語教師が最も大きな割合を占めている (Okhidoi, 2005)。

### ③学校を超えた学びの共同体

集団でプロジェクトを組む場合、教師対学習者、学習者同士という、学校内の活動も可能だが、外国語である以上、積極的に学校を超えて海外の学習者たちと共同で取り組みたいものである。問題解決のために海外との円滑なコミュニケーションを図る道具としての英語を実感したときに、学習者は英語使用への最適な動機付けが得られ、英語学習を正しく位置づけることが可能になる。

### ④目標のための調査・研究

調査・研究そのものを目標としたプロジェクトでは、学習者の興味・関心を維持させることが難しい。しかし、外国の人たちと英語でコミュニケーションを図りながら、それぞれが個性を発揮できる目標を達成するための調査・研究であれば、学習者は強い動機付けを与えられる。

プロジェクトの成否は、可能な限りこの4つの条件を満たした上で、目標の設定・計画から、外国の人達との連絡・調整、学習者による調査・研究への支援、作品の完成、評価という一連の流れを、教師がいかにうまく組み立てて推進できるか次第なのである。

## V. 共同プロジェクトの展開

共同プロジェクト活動は次のような段階をおって実施されることになるが、ここで各段階での留意点を考えたい。

### 1. テーマの設定

iEARN は、共同プロジェクトによって、「学習者達が研究や批判的思考のための技能を身につけ、新しい技術を体験し、文化的意識や社会問題に係わる習慣を育てることができるようになる」<sup>\*3</sup> (筆者和訳) としている。外国語教育の観点から考えれば、英語教育にこうした活動を導入する目的は、調査・研究のためのコミュニケーション手段としての英語運用能力と新しい情報リテラシー、それに地球市民として異文化理解を深めながら社会の問題に積極的に係わりようとする態度を育てることである。

目標となるテーマを設定する際には、学習者が興味・関心を持ち、活動に意義を感じるものを優先すべきである。英語の時間の発展的活動として導入するなら、教科書の言語材料や題材に関連して目標に組み込めるようなものに限られるが、課外活動として、あるいは総合的な学習の時間と連携して行なうなら、独自の目標を設定することができる。

具体的な調査・研究のテーマとしては、衣食住、生活習慣など、取り組みやすい身近なものから、学校教育、政治、経済、環境、福祉、社会問題など、かなりの英語力を必要とするものまで様々なテーマが可能である。いずれにしても学習者の英語力にふさわしいテーマで、海外と共同作業をする意味が分かりやすいものを選ぶべきである。

\*2 これは1988年に設立されたNPOが管理運営しており、現在115カ国20,000以上の学校が参加し、毎年40万人以上の学習者が世界各地で学びの共同体を形成しながらプロジェクトに取り組んでいる。

<<http://www.iearn.org/>>

\*3 <<http://www.iearn.org/about/index.html>>

## 2. 共同クラスの選定

まず個人、グループ、クラスのうち、どの単位で学びの共同体を形成して交流させるのかを決める。クラスの場合は、相手側の教師がプロジェクトの目標を理解して共有してくれることが最も重要な条件となるので、事前のやり取りを通して、最後まで責任を持ってプロジェクトを遂行してくれそうな相手かどうかを見極めなければならない。次に交流相手として、彼らの英語がそのままモデルになる英語母語話者を選ぶか、それとも、相手に引け目を感じることなく安心して英語が使える非英語圏の学習者を選ぶかも重要な選択である。どちらも長短があるが、概して英語力が中級までのレベルでは非英語圏の方が、それ以上なら英語圏の方がうまく行くようである。さらに、プロジェクトが長期にわたる場合は、学年暦も大切な要素になる。

## 3. 交流方法の決定

交流方法としては、Eメール交換以外にも、集団の意思疎通が効率的にできるメーリングリスト、話し合いの流れがつかめる掲示板、相手の存在を実感できる（テキスト・ボイス・ビデオ）チャット、より臨場感のあるビデオ会議などがあるが、共同作業の内容と学校の整備状況を勘案して、どの機能を使うのかを決定する。また、交流を楽しく活発なものにするためには、自己紹介をしてから親しくなるまでの時間を充分にとる必要がある。

## 4. 共同作業内容の決定

共同作業については、様々なものが考えられる。例えば、iEARNでは150ほどのプロジェクトを主に分野によって“Creative Language Arts,” “Science/Environment/Math,” “Culture and Society”と“Learning Circles”の4つに分けているが、共同作業の形態でも大きく4つに分類でき、それぞれの具体例としては、iEARNで実際に行われているものを含めて、次のように多様な活動が考えられる。

### ①ウェブサイトの制作を目標とする。

これには、学習者のレベルによって、ただそれぞれが自分の情報を送ることでお互いに異文化理解を図ろうとするものから、作成の過程で話し合いや議論を重ねて自分たちの考えを深めていくものまで様々な活動がある。

- ・それぞれが自分の名前とその意味、命名の由来と手続き、ニックネームについて書き込み、世界の「名前」の多様性を知る。
- ・まず共通の項目で自己紹介をさせ、学習が進むにつれて写真や映像も加えながら家族紹介、学校紹介、地域紹介、自国紹介へと項目を増やしていく。
- ・それぞれが普通の一日の過ごし方を書き、身の回りのものについての写真などもつけて掲載することで、世界の国々の暮らしぶりを知る。
- ・新年を迎えたときの挨拶の文字と音声、それに風習を集め、各国の新年の祝い方を通して異文化理解を深める。
- ・ユニークで興味深く、考えさせられる写真や絵などを、それについてのエッセー、詩、物語などと共に投稿する。

- ・自分が夢見る理想の世界について、詩や、エッセー、物語、絵画などを送り、世界の仲間たちの考えを知る。
- ・自国の民族衣装を写真つきで紹介し、それを着るTPOを説明する。それぞれの風土に適した衣装を知ることで、地球上の文化の豊かな多様性が理解できる。
- ・一般的な朝食、普通の飲み物、よく出る家庭料理、ご馳走とされる料理、季節や行事に特有な料理があるかどうか、料理にまつわる伝説、人気があるお菓子等、食文化に関する一定の項目について写真つきの一覧表をウェブサイトに掲載し、世界各国の人からの投稿を求めて追加しながら世界の食文化の全貌を伝えるサイトを完成していく。
- ・写真つきでペットを自慢し合うことから始めて、お互いの質問を基にそれぞれが自国のペット事情を調べて発表する。
- ・非英語圏の人達と、英語でお互いの言語の特徴を音声付で紹介し合い、相手国からの質問を基に、様々な観点から二つの言語を比較対照するウェブサイトを作成する。
- ・自分の家と、自分の町にある建物の特徴や歴史を写真や絵と共にウェブ上のギャラリーに掲載し、お互いに質問や意見を交換する。
- ・自分の国でよく使われる諺とその意味、あるいは迷信とその起源を紹介し合いながら、質問のやり取りや調査を通してお互いの文化について理解する。
- ・自分の国の冠婚葬祭の行事を紹介し、お互いに意見を交換して、どんな風習を大切に、何を改善すべきかを考える。
- ・お互いに自分の国の童話や昔話などの民話に写真や絵をつけたものをウェブサイトで紹介し合い、相手側からの質問や感想も含めて類似点と相違点を挙げながら、それぞれの文化との関連を考えていく。
- ・それぞれが自分の国の神話を紹介し、話し合いながらその類似・相違点と背景の価値観を探り、その結果を発表する。
- ・世界各地から、その土地の自然の今昔についての文章や写真を集め、地球規模で自然保護について考える。
- ・それぞれが自分の生活信条と、その理由を書いたエッセーを発表し、それについてお互いが話し合い、世界共通の原則を探って行動を起こすきっかけにする。
- ・それぞれが色々な国について持っているステレオタイプを表明し、その国の人から情報を得て、それがいかに偏っていたり、古い情報に基づいているかを明らかにして、正しい異文化理解を促進する。
- ・世界の若者が身近にあった善い行いについての話やエッセーなどを投稿し、それを基に話し合うことで価値観の類似性や多様性に気づいたり、自分の行動を省みる契機とする。
- ・お互いに自分の国のヒーローだと考えている人について相手側が取材し、外国人の視点からそのヒーローを紹介する模擬テレビ番組をウェブサイト上に掲載する。
- ・最近起きた世界の大事業がそれぞれの国でどのように報道されているかを調べ、その違いの原因となっている国民の意識や報道姿勢を考えるウェブサイトを作成する。
- ・目の不自由な人が盲導犬と共に、自分の学校から外国の交流先の学校に行くために、最も費用が

かからない方法と最も速い方法を、相手からの情報やウェブ上の情報を基に調べ、両国の障害者福祉の現状とその問題点を伝えるウェブサイト共同制作する。

- お互いに自国の伝統文化や風習を紹介し、そのうちの何を維持し、何を破棄すべきかを話し合い、進歩発展とは何かを考える。
- 言語、文化、民族は違っても、同じ希望や恐怖、興味や関心を共有していることを示すために、中高生による詩や散文や写真などを集めた文芸雑誌 *A Vision* を PDF ファイルで発行する<sup>\*4</sup>。
- オンラインで一定のプログラムを受講して認められると、中高生で作るウェブ上の新聞 *PEARL World Youth News* の記者として記事を書くことができる<sup>\*5</sup>。
- 地球資源や環境問題についての若者の意見を様々な形で集め、それをウェブ上の放送局 *One World* から世界に発信する<sup>\*6</sup>。

② インターネットを使ったやり取りを重ねながら、ウェブサイト以外に、テーマに沿った作品を分担して制作する。

- “Comfort Quilt” をクラスで作作り、励ましの手紙を添えて被災地の子ども達などに送る<sup>\*7</sup>。
- 文化の多様性、環境問題、原住民、スポーツなどをテーマに世界各国から寄せられた絵で世界最長の壁画を作り、ギネスブックに載せる<sup>\*8</sup>。
- クラスで美德について話し合っ深めた内容を、まず文章や芸術作品の形でウェブ上に掲載し、さらに議論を深めて本を出版する。

③ テーマをめぐって実社会で展開される様々な動きを疑似体験してみる。

- 熊のぬいぐるみをお互いの親善大使として交換し、生徒たちが交代で家に持ち帰って、ぬいぐるみの立場で疑似体験したことをEメールで逐一報告する。“The Teddy Bear Project<sup>\*9</sup>” として広く知られたプロジェクトである。
- まずお互いに自分の学校について写真やビデオ入りで詳細に紹介するウェブサイトを作成し、相手クラスが疑似訪問した上で質問したり議論したりしながら両国の学校の違いや教育問題を考えるページを追加していく。

④ 地球市民として直面する課題を協力して解決しようとする

- 世界に広がる薬物汚染について、若者たちが自分の考えや、薬物の恐ろしさについての情報を分かち合い、この致命的な病をどう解決するかを考えるウェブサイト運営する。
- お互いの国で絶滅の危機に瀕している動物について調べ、意見交換をしながら地球規模での取り組みを提言するウェブサイト共同制作する。
- 世界中の聴覚障害を持った人達が自由に意思の疎通ができるように、各国の手話をもとに世界共通の “international sign language” を創る<sup>\*10</sup>。

---

\*4 <<http://www.learnonline.org/avision/>>

\*5 <<http://www.learnonline.org/pearlproject/>>

\*6 <<http://www.learnonline.org/projects/oneworld.html>>

\*7 <<http://www.learnonline.org/projects/comfortquilts.html>>

\*8 <<http://www.learnonline.org/projects/artmiles.html>>

\*9 <<http://www.learnonline.org.au/tbear/>>

\*10 <<http://www.learnonline.org/projects/international-sign-language.html>>

- ・世界中から様々ないじめの情報を集め、体験を話し合ったり、励まし合ったりして解決策を探ろうとする。“Where You Are NOT Alone<sup>※11</sup>” は問題解決プロジェクトの好例である。
- ・世界中の子どもたちが自然災害と命の大切さを学ぶために交流を深め、国際会議（Natural Disaster Youth Summit）を開いて防災について共に考える<sup>※12</sup>。阪神・淡路大震災での教訓を生かして日本から発信される貴重なプロジェクトである。

## 5. 成果の発表

共同作業の成果を発表する方法としては、ウェブサイトの作成の他、クラスでのグループ毎によるプレゼンテーションや冊子の発行、あるいは校内放送番組の制作や文化祭などでの展示発表などがあるが、どのような形であれ、発表そのものにも学習者の独創性や才能を十分に発揮させたい。

## 6. プロジェクトの評価

共同プロジェクトでは、評価のための資料として共同作業などの過程での原稿、交信記録、各種調査報告書、作成したウェブサイトなど、努力と進歩と業績が形となったものすべてをまとめてポートフォリオ（portfolio）として提出させることが多い。これは学習者自身にとっても努力と成長を客観的に辿る材料となり、成果をあげられなかった者には何が欠けていたのかを認識させる一方、成果を収めた者には達成感や自信を持たせ、更なる学習活動に向けての動機付けともなる。その他、プロジェクトに取り組んだ毎日の詳細な記録（journal）や学習者自身による自己評価、あるいは交流相手同士による相互評価なども加味して総合的に評価すれば、更なる取り組みへの意欲を喚起することができる。

## VI. 共同プロジェクトの課題と可能性

従来の学校英語教育では極めて稀であった海外との共同プロジェクトを効果的に推進するには、解決しなければならない課題も多い。まず何よりも教師に求められる新しい役割に対応する意識改革である。教師は、今までのように教壇から一方的に「教える」だけの役割ではなく、「学びの共同体に加わり学習を支援する」役割を求められる。多様な選択肢の中から、学習者が本当に情報をやり取りしたいと思うプロジェクトを選ばせることに始まり、プロジェクトが進行するにつれて具体的な作業でのヒントや助言を与えて軌道修正したり、望ましい方向へ発展させたりする必要もある。作業が停滞したり、障害に直面したときには激励したり賞賛したりすることも大切な役割であり、更にソフト、ハードの双方についての質問に答える必要もある。評価に関しても、従来のように知識の量や正確さではなく、何ができるのか、そして実際に何をしようとして何を成し遂げたかという観点から行われなければならない。

その他にも、情報機器やLANなどの整備・維持を支える経済的な基盤や、学習者の情報リテラシーを向上させるための情報処理教育などに加えて、こうしたプロジェクトの展開に求められる教員の熱意と労力が正当に評価される体制を整えることも大きな課題である。

---

※11 <<http://www.bullying.org/>>

※12 <<http://ndys.jearn.jp/>>

しかし、こうした課題に取り組みながら共同プロジェクト活動を導入して英語教育の内容を豊かに拡充することができれば、情報処理能力や批判的思考能力、そして問題解決能力を育てながら、自然な形で実践的コミュニケーション能力が育成できるばかりでなく、地球市民としての連帯感を基盤とした確かな国際理解を深めることもできる。そして英語教師は、人格の完成をめざす学校教育の中で、英語教育の最終目的が、英語そのものを超えて、人類が直面する様々な課題を解決できる地球市民の育成にあることを主張できるようになるのである。

参考文献

- Chapelle, C. A. 2001. *Computer applications in second language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. 2003. Attitudes, orientations, and motivations in language learning: Advances in theory, research, and applications. *Language Learning, 53: Supplement 1*, 3-32.
- Dudeny, G. 2000. *The Internet and the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ehrman, M. 1996. An exploration of adult language learner motivation, self-efficacy, and anxiety. In R. L. Oxford (Ed.), *Language learning motivation: Pathway to the new century* (81-103). Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawaii.
- 松本青也・野口朋香 2003 オンライン学習におけるボイスチャットの課題と可能性 外国語教育メディア学会（LET）第43回全国研究大会発表論文集 309-312.
- 文部科学省 2005 学校における情報教育の実態等に関する調査結果  
<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/17/08/05080101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/08/05080101.htm)>
- 文部科学省 2005 文部科学省実績評価書  
<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/hyouka/kekka/05090201/005.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/05090201/005.pdf)>
- 21世紀日本の構想懇談会 2000 日本のフロンティアは日本の中にある  
<<http://www.kantei.go.jp/jp/21century/houkokusyo/1s.pdf>>
- Okhidoi, O. 2005. *iEarn annual survey 2005 report*. New York.  
<<http://foro.iearn.org/iearnforums/evaluation/>>
- Warschauer, M., Shetzer, H., & Meloni, C. 2000. *Internet for English teaching*. Alexandria, Virginia: Teachers of English to Speakers of Other Languages.
- Windeatt, S., Hardisty, D., & Eastment, D. 2000. *The Internet*. Oxford: Oxford University Press.
- 八島智子 2004 外国語コミュニケーションの情意と動機 関西大学出版部